

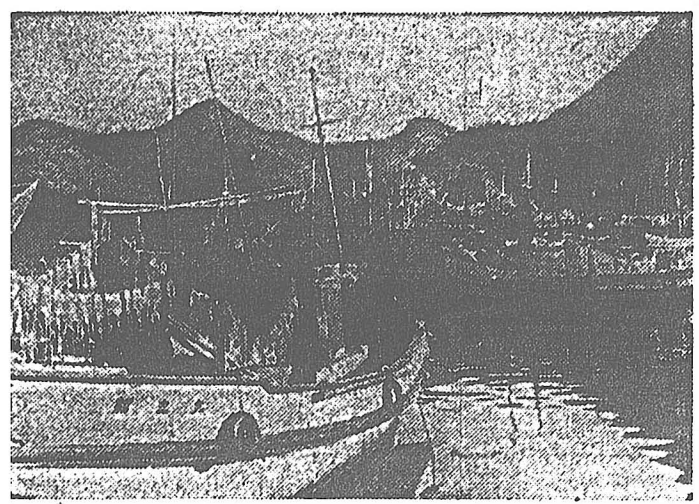
対馬の熊本漁民

現地
報告
(上)

沿岸漁業が不振の現在、生活性の低い寡細な、従って手放しに熊本漁民の入漁を歓迎し、熊本の水産界にとって、近海漁業はのこされているわけではない。それにこの漁期は皮肉なその名の網といえよう。とくに大規模問題にも大漁食に買舞われた。魚船が手痛くたいらい対馬海域への進出がにわかにクロス、たかれ、販路のあはなく、旅の空がはつらアップされた。

見出した活路

現在県下から約百隻が同海域に入漁して、鯉イカ漁に従事している。いずれも五ヶ月前後の小舟をあやつり、とつとピンチに立たされているようだ。つぎ板子一枚の危険をおかして活躍しているが、記者が現地を直接訪問した、対馬における活路の前には予期せぬ伏兵も多いようだ。沿岸漁民の事情——(岡田記者)



○下関を多六時に発つと真夜中の三時すぎ比田勝(西伯港)に着く。港内に入ると夜の海を色するイカ船が点々としている。ここは天草郡竜ヶ雨町大、道、樋島の船団が基地を置いて西伯漁場を通じて水揚げしていた。夕方五時半ごろからいっせいに沖をめざして船団は出港していき、関西方面へ運搬されている鮮魚船からのマイクで、「きよの積荷は二万尾」というアナウンスをきくと船団の表情は晴れがましい船出とは逆に複雑な面持ちとなる。船腹の都合で三万尾積み込んだら一切鮮魚を引き取らないという宣言であり引き揚げた船庫で入れられるからだ。そこで各船とも満載してノコノコ帰ってくるわけにはい

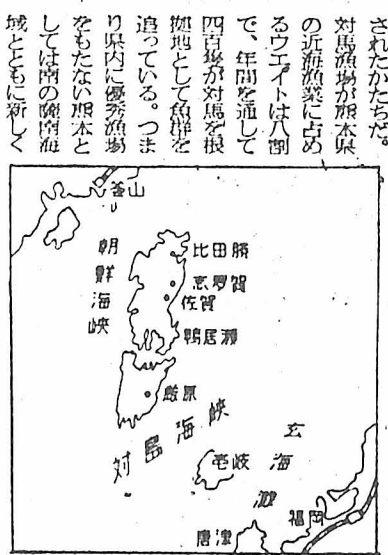
ない。千尾か千五百尾、尾獲つたらサツと引き揚げた入札を終わって、からまた出港していく手もあるが、鰯を待つていううち朝にまることがしばしばだ。

○ところで対馬のイカ一本釣りの基地はほとんどが東沿岸にある。熊本県からは一昨年までは半少半入港する程度だったが、昨年十一月には西対馬の西伯(大連船団)の千隻、樋島(千隻)をふくむ御所浦船団、逃げ足の遅い小艇船はとて

百隻に浮沈をかける

だが、よそ者の辛さも

○もともと対馬は半農半漁で専業者は非常に少ない。日本一といわれたサバ漁場には船外の中型船団が押しかけたがサバ群が日本海方面へ移った千八八八ごろからは激減して「サバ景気」も一時的なブームに終わった。かわってむかしからのイカ漁業がこの地方の経済をささぐ三十二年度には千五百、(百八十万圓)約億圓の水あげがあった。サバの最大の漁場が九州府中の釜ノ内にあるので、逃げる足遅い小艇船はとて



(七隻)が入ったのをはじめ、中部対馬の佐賀港に達空木(六隻)、大尾尾(二隻)瀬港に新和、赤崎(三隻)、久須保港に姫戸、牟田(六隻)、志多賀港に大矢野、樋浦(二隻)など約六十隻がどつとおしかけ、現在では百隻に達している。もつと多くの船団を抱えている鴨居港には遠く北進港をはじめ山口、船根からもやってきて四千隻(地元をふくむ)がきびすを揃えている。それも漁獲の少ない県ほど多くの船を出漁させて、沿岸漁業の不振がそのままここに集約されたかたちだ。

対馬漁場が熊本県の近海漁業に占めるウエイトは八割で、年間を通じて四百隻が対馬を根拠地として魚群を追っている。つまり県内に優秀漁場をもたない熊本としては南の薩南海域とともに新しく生きる路である。しかしそれは余りにか細い命の綱だ。

○もともと対馬は半農半漁で専業者は非常に少ない。日本一といわれたサバ漁場には船外の中型船団が押しかけたがサバ群が日本海方面へ移った千八八八ごろからは激減して「サバ景気」も一時的なブームに終わった。かわってむかしからのイカ漁業がこの地方の経済をささぐ三十二年度には千五百、(百八十万圓)約億圓の水あげがあった。サバの最大の漁場が九州府中の釜ノ内にあるので、逃げる足遅い小艇船はとて

い出漁も出来ないのが実情。そこでイカ釣りを生計としている漁民にとつて他県からの出漁を暖かく迎えるわけにはいかず、密着者扱いにしているしに漁を止めたがらない。ただ西伯漁場などでは熊本県の立場には同情的で、断然自由にとらせている。いまのところ長崎県は正面切つて反対を主張せず地元漁民を守る意味から「一応出漁船を県に申請し、集魚灯三千シヨク光に制限することを要請している」のだが……。

○熊本の漁船はいずれも内海用だから小さい。五ヶ月前から小